

## 書評

### 賀川豊彦著 『小説キリスト』

(ミルトス, 2014年)

中山弘正

ミルトスという出版社から、2014年3月に出版された。「復刻版」と小さく印刷されていて、上記のタイトルが大文字で入っている。表紙も入れると厚さは4センチもある。表紙の帯に「80年ぶりに復刻！」と記されている。そして「本書は、賀川文学の集大成」とも書かれており、次のように続いている。

「世界的なキリスト教伝道者・大ベストセラー『死線を越えて』の作者・生協の父と呼ばれる賀川は、渾身5年の歳月をかけて、この小説にキリストの愛の姿を描く。」

小さな著者紹介によれば、彼は1888年神戸生まれ、明治学院で学んだが、その後の自伝小説『死線を越えて』（1920年出版）は大正時代最大のベストセラーになり、国内外で広く知られるようになった。敗戦後の働きのひとつ「世界連邦運動のリーダーとして平和運動を推進。ノーベル平和賞候補および文学賞候補にも推挙されている。」1960年4月逝去、とされている。

目次を記すと、1章 ガリラヤ湖畔のイエス、2章 エルサレムの弟子、3章 北に旅するイエス、4章 エルサレムのイエス、5章 ギレアドの山々、6章 テベリアとカイサリアの宮廷人、7章 ペレアのイエス、8章 真夜中の訪問者、9章 民の罪を負う神の子羊、10章 最後

の晩餐, 11章 不法な裁判, 12章 十字架への道。

聖書を読んだことのある人ならば、マタイ伝に始まる4福音書がベースになっていることはすぐにわかるであろう。しかし、本書が「小説」とわざわざことわってあることから推測されることであるが、ひとつ、ひとつの出来事とか発言とかの「出典」をいちいち指摘するということは全くなされていない。まさに、小説を読むように読んでいく、ということになる。例えば、4章は、9節に分かれていて、「ベタニアの宿、ざくろの花、賽銭箱の傍、地に描くもの、人の罪を己の罪として、エルサレムの搾取者、アンナスとカヤパ、贖罪日、真理と自由」といったふうに、順次に展開していく。例えば、マリアが野の百合の花のようになるって、どうすればいいでしょうね?とたずねると、イエスは「それは、天真爛漫になってさ、神の心を人間の心として、その日その日を送ってゆけばいいのさ」と答える。「先生、神の子にされるっていうのは、そういう気持ちでいうんですか?」イエスは、にっこり笑った。そしてマリアの二つの眼の視線と、イエスの二つの眼の視線が、瞬間的に結ばれた。マリアもにっこり笑った。「そうだ、そうだ、君はよく分かっているね、こうして腰掛けている瞬間でも、天地の神様の胸のうちに抱き締められている有り難さを、刻々忘れないで、すべてをそこから出発して仕事をするんだね。」(174頁)

本書の全体が、ざっとこうした形で進められていく、まさに「小説」なのである。福音書そのものを読んでいるときとは無論、異なった何かやわからかさ、あるいは優しさ、身近さも感じられるのである。

ところで、ここで、明治学院引退後、永年、賀川豊彦松沢資料館の館長を務められた加山久夫先生の「編者あとがき」に目を移してみたい。そこには「正直に言って、新約聖書を研究分野とする私には、本書の復刻に少なからざる逡巡がありました。」とあり、最近の数多い「イエス本」、資料的研究面での目覚ましき、などを考えると、「70年以上も前

に刊行された本書の復刻にどれほどの意味があるのか」が逡巡の理由であったが、「しかし、この度、この作品を読み返してみても私のその思いは少しずつ変えられてゆきました。」(532頁)とされている。しかし、諸般の点から考えると「本書はまさしく『賀川のイエス・キリスト』なのです。つまり、本書のキリスト像には賀川像が投影されており、著者賀川にはキリストが生きているのです。」(534頁)加山師は続けて、賀川が聖地を二度訪ね、広く諸資料にあたり、想像力をはたらかせてプロット、人物、仕掛けなどを創出していることも評価しておられる。

加山師が刊行の底本にされた『小説キリスト』は、昭和13年・改造社版、とされていて、わたしはびっくりした。私自身の生年なのである。私自身は、すでに70才台も後半。私自身が生まれた頃、もうこれほどに広く・高く・深いキリスト像が日本でも示されていたのだ、と思うだけでも、主イエス・キリストの大きな強い力、また素晴らしさに胸が熱くなる。

書評というよりも小紹介といった方がよいと思うが、ぜひ本書が大勢の日本人の手にとられることを願いたい。加山師が言うておられるように、「本書がキリスト(教)への関心をもつ糸口となり、……聖書そのものをお読みになる動機を提供すること」を強く願う。